

沙門はくいの CL 閑話 47

不思議

-善い悪いを考えない-

遠藤博因 hakuin@river.ocn.ne.jp



今回もまた禅の逸話から始めたいと思います。

五祖弘(く)忍(にん) 禅師はあまたの弟子の中から夜半ひそかに慧能(えのう)に法を継がせ、その証として衣と鉢を譲り渡し、時が来るまで諸国を行脚し修行せよと、道場から送り出した。それを知った明上座は、慧能を追って山の嶺まで辿り着つた。

慧能は明(みょう)上座がやって来るのを見て、衣(ころも)と鉢(はつ)を石の上に置いて、「この衣は信の象徴であって、力をもって争うものではない。持ち去ろうと言うのならそうするがよい」と言い放った。

明上座が衣を持ち上げようとしたが、山のように微動だにしない。驚いた明上座は、「私は法を求めて来たのであって衣のためではありません、どうかご教示ください」と仰いだ。

慧能は「善を思い悪を思うことをやめよ。このときあなたの本来の自己はどのようなものか」と言った。

この言葉を聞き明上座は直ちに悟り、全身に汗が流れた。

「私はあまたの雲水と修行してきましたが、本当の自己に目覚めることができませんでした。しかしあなたのご教示により、人が水を飲んでその冷暖を身をもって知るように、今、自ら知ることができました。あなたこそ私の師匠です。」

慧能は「あなたが本当の自己に目覚めたのなら、あなたも私も共に五祖弘忍禅師の門下です。今の目覚めを大切に修行してほしい」と諭した。

今回のお話は、中国禅を確立し発展の礎ともなった六祖慧能(えのう)禅師の逸話です。慧能の出自は貧しく薪を売って母を養っていたそうです。ある日、市井の通行人の唱える経文が強く心に響き、尋ねたところ弘(く)忍(にん)禅師から教わったとのこと。慧能は是非この弘忍禅師の下で修業したいと願っていると、幸運なことに資財の恵みを受け、母の生活にその財をあて、自分は弘忍禅師を求めての行脚(あんぎゃ)が実現したとのことでありました。

目標通り弘忍禅師に見え、最初は米つきの役務をしながらの修行が許されました。慧能は黙々と修行に励んでいました。ある日、弘忍禅師が修行僧に向けて、我が正法を継ぐにたる者、悟りの境地を偈(げ) (漢詩)であらわせと布告しました。一番弟子と目されている神(じん)秀(しゅう)上座が偈を作り僧堂に貼りだしました。

これを見た慧能は、良い偈ではあるがまだ悟りの境地を透徹するだけのものはないと感じ、自らの偈を童子に頼んで代筆してもらい(文字を書くだけの教養が身につけていなかった)ので貼りだしました。

この二つの偈を見比べた弘忍禅師は、慧能の偈の方がはるかに高い境地に達していると感じたが、まだ入門したての米つき修行僧に法を継がせると公言する訳にもいかず、夜中にこっそり慧能を呼び出し衣と鉢を渡し、ここから去るように言ったのが、冒頭に掲げる今回の逸話に至るまでの経緯です。

六祖慧能禅師の逸話が多少長くなってしまいましたが、今回は慧能が明上座に対して教示した「善を思い悪を思うことをやめよ」という言葉に着目してみたいと思います。私たちの判断基準は常に善悪、損得、好き嫌い、多い少ない等の二項対立の上にならなっています。禅はこの相対的な判断基準を取り払って絶対的な世界に生きよと教えます。一般の方々には何か浮世離れした非現実的な世界のように思われるかもしれませんが。しかし周りを見渡せば、この善悪、損得に囚われて行動したばかりに、愚かな結果を招いていることがいくらかでも見つかるのではないのでしょうか。


CL的な考え方の中にこのようなものがあります。あなたが正しいのに他人に譲歩したことがありますか？あなたが悪くないのに他人に謝ったことがありますか？このような行動は常識とは対立します。ここでこのような状況を上手く生き抜くための方法は、考えたり、抵抗しないことです。自分の外見をとりつくることや、自分を守ることよりもっと重要なことがあるはず。自分はこの世界からどんなにたくさんのものを

享受しているか、どんなにたくさん他人に迷惑をかけているかということなどをなぜ無視するのですか？
『Gateless Reflections by D.K.R』

禅や CL は人生をより上手に生きるためのヒントを与えてくれますね。常に軌道修正しながらより良い毎日を送りましょう。

今回も誌面にて皆さんとお会いできるご縁に感謝して

合掌
(富山県南砺市井波 CL インストラクター)

 [目次へ戻る](#)